植民地下朝鮮からの女子内地留学生（Ⅳ）

Research on Korean Female Students Studying the Main Islands of Japan during the Japanese Colonization of Korea（Ⅳ）

太　田　孝　子

要旨：

同志社女子専門学校は、1876（明治９）年、アメリカから派遣された女性宣教師によって開校し、当初から英語で授業が行われるなど、国際色豊かな学校として出発した。キリスト教文化を体験させ、キリスト教的価値観を根付かせることを目的に「寄宿学校（ボーデング・スクール）」による教育形態を用い、寄宿舎内では多様な訓練が行われた。

1910（明治43）年代になると、朝鮮、台湾、中華民国からの留学生が入学するようになり、中でも朝鮮からの留学生が７割を占めた。留学生は教室へもチマチョゴリで出席している。高凰京は朝鮮人留学生の中でも傑出した人物であり、女専を卒業後、同志社大学法学部に入学し、さらには同志社から奨学金を得てミシガン大学に留学した。多くの学びや体験がソウル女子大学学長としての職務の中に結実しているが、向学心に燃える学生たちに大きな影響を及ぼす人生を送った。高をはじめ、これまで取り上げてきた留学生たちの生涯を概観し、朝鮮からの女子留学生たちが帰国後に果たした役割を考察することによってまとめとした。

本稿は、「植民地下朝鮮からの女子内地留学生（Ⅰ）」（岐阜大学留学生センター紀要2010年号）、「植民地下朝鮮からの女子内地留学生（Ⅱ）」（同2011年号）、「植民地下朝鮮からの女子内地留学生（Ⅲ）」（同2012年号）の続編である。

２．４　同志社女子専門学校への留学生

１）同志社女子専門学校の歴史と教育理念

女子美術専門学校[1]（107人）、帝国女子専門学校[2]（83人）に次いで多くの朝鮮人女子留学生が在籍した学校は、同志社女子専門学校（以下、同志社女専、女専）である。朴宣美の調査[3]では82人（1912～44年）、同志社女子大学の学校史には94人（1914～44年、予科27人、英文科19人、家政科48人）と記されている[4]。それ以外の国からの留学生は台湾から25人、満州から６人、中華民国から５人であり（計130人）、朝鮮が７割以上を占めていたことが分かる。特に、家政科には1932～36年の５年間に28人が在籍しており、朝鮮からの留学生は無視しがたい存在[5]となっていた。

先ずは、多くの朝鮮人女子留学生が在籍した同志社女専の歴史を振り返りながら、キリスト教主義学校における留学生受け入れの特徴を探ってみたい。

同志社女専は、アメリカのウーマンズ・ボード[6]から派遣された女性宣教師Ａ・Ｊ・スタークウェザー[7]が京都御苑内の旧柳原前光邸で、1876（明治９）年10月24日に女子塾（「京都ホーム」とも呼ばれた）を開設したことにルーツを置き[8]、法的には「同志社分校女紅場開業願」が認可された1877（明治10）年４月28日を開校日としている（開業願提出は４月23日）。しかし、開業願に付け

られた「学科目（綴字、正音、作文、文法、算術、地理、理学大意、万国史、修身学、裁縫、日本学）」に対して、京都府勧業課が「女紅は勧業授産のためのものであり、女紅場の学科としてはふさわしくない。女学校と改称すべき」と上申したため、同年９月に改称願を提出し「同志社女学校」と改称した。教育理念に即した「よりふさわしい校名に落着した」[9]と言うことができる。寄宿生４人、通学生８人、計12人の女学生による出発であった。翌1978（明治11）年６月の「同志社女学校広告」では、「男女の分（わかち）なく学の道の一日も離（マ）べ（マ）からざるものなりとしろしめす人々の速に女子の入学を促し玉ひ真の楽をゑさしめ玉はんことを希ふになん」と謳って、全23科目を教授すると発表した。開業願に付けられた学科目の他、体操、音楽、英学、点算、度量学、地理書、人身窮理、天文学、心理学なども含まれており、女性にとっての伝統的な科目と思われるものは習字、裁縫、割烹のみであった。程度は不明であるが、創立当初からリベラル・アーツを目指していたことが分かる。女性宣教師スタークウェザー、外国人教師Ｈ.Ｆ.パーミリー[10]、同志社英学校卒業生の宮川経輝と加藤勇次郎が授業を担当し、ほとんどが英語で行われた。卒業生たちは草創期の様子を以下のように、回想している。

> 学科は一切英語でやらねばなりませんでした故、理屈を憶える前に、先づ第一英語が読めて意味を取って行く事ですが、力の不足の者には是がなかなか大変で、学科を学ぶと云ふより、ただ英語を読むと云ふ事に骨折りましたから、自然、学科の進歩はおそう御座いました。英語を通して学科を学んだのでは無く、学科を通して英語を学んだのであります[11]。
>
> 偶々伊藤公、井上候等の名士が学校を参観せられ、其度毎に言はれるには、日本も外人が内地雑居する時が来ました。婦人も今覚醒しなければなりません。料理は女中がして呉れます、子供は乳母が育てます、あなた方は唯英語を学びなさい、そして西洋文明に一日一日接して行く事が目下の急務でありますと説かれました。此時から学校当事者も更に英語教育に力を籠め、其程度を高め、日本裁縫の時間は英会話となり、日本習字は英習字と変わりました[12]。

初期の学生のうち土倉政（第７回本科卒）と松田道（1887年同志社女学校３年次にフェリス英和女学校に転校・卒業、再度同志社女専文学科に入学）がペンシルヴァニア州プリンモア大学に留学するなど、早くから留学生の派遣にも力を入れている。

さらに、スタークウェザーによる讃美歌とオルガン教育が早々に開始されていたことも、他校と異なる点である。上記「広告」に「音楽」を挙げて以来、課程表には唱歌、オルガン演奏の指導が含まれたため、学生たちは教会の礼拝等で力を発揮するようになった。中島重千代は1886（明治19）年に卒業後、音楽取調掛（東京音楽学校）に進学している。翌87（明治20）年に音楽の専門家である宣教師Ｍ.Ｅ.ウェンライトが着任すると一段とレベルアップし、３年制の「音楽科」（別科）が設置され[13]、「発音法、楽譜、唱歌、ヲ（マ）ルガン、ピヤ（マ）ノ」を教えた。1892（明治25）年に林外浪（1888年本科卒）が「英学及音楽修業之為」米国ロックフェルド大学へ留学し、山口義（1894年普通科、96年本科卒）はイエール大学大学院音楽部に入学、日本人で最初の音楽学校学生となった。松田幸は1898年にボストン音楽学校へ留学し、さらにベルリンへ移り、女性ピアニストのイエドリッカに師事している。

ウーマンズ･ボードの資金により存立することのできた同志社女学校は、当初から国際性を持った学校として出発したのである。

上記のような訓練を受けた寮生たちの多くが、「十四五歳の子供ながら日本帝国に対する責任、

婦人の使命と言ふ事を常に感じ」[14]、「卒業後の希望は、伝道師になるとか教師にならうと思ふとか云ふので、決して家庭に這入らうなどと思って居る人は唯の一人も」[15]いなかったと述べている。しかし、最初から学校経営が順調に進んだわけではない。仏教・神道など旧来の宗教からの嫌がらせが激しかっただけでなく、古都の住民の中には外から入ってくる異質のものに対する拒絶反応が強く、キリスト教主義女学校に対しては全く冷淡であった。その上、「この国では新島襄でさえ、女性が学校の長になるという考えになじめない」[16]という手紙に象徴されるように、女性宣教師と日本人男性教師との軋轢や確執も存在した。このような異文化摩擦を乗り越えるには、かなりの時間が必要だったことも付記しておきたい。

同志社女学校の最も大きな特徴は、「寄宿学校（ボーディング・スクール）」の形態による教育が行われた点にある。女性宣教師たちは「異教の国日本」にキリスト教的価値観を根付かせるためには、教室の授業だけでなく、毎日の生活を通してキリスト教信仰あるいは文化を体験させることが必須だと考え、寄宿舎内で多くのキリスト教的訓練を実施した。1890（明治23）年の寮生の１週間の日程は以下の通りである。

> ５：00起床後直ぐに10分間の黙思。その後洗面、掃除、朝食準備、朝食等。週の初日である日曜日は９～10：00同志社教会の礼拝出席、13：30からキャンパス内で安息日学校開校、18～19：00讃美歌練習、19～20：00上級生のみ英語の聖書研究とその後30分間の祈祷会、月から金曜日は７：30から30分の礼拝の後、９～16：00まで授業、16～17：00まで運動遊歩（月・金は校庭で体操）、夕食後18：30から30分間寮生のみの祈祷会、火曜日は祈祷会後20：00まで「社会に関する談話」の時間、金曜日18～19：00は同志社教会の祈祷会出席、それ以外は毎日夕食後22：00まで自習、土曜日14～16：00は有志で「真働会」を持ち、裁縫・編み物などの手芸をして、孤児教育など慈善事業のための寄付金集め等々[17]。

上記のように日程が細かく決められており、すべての集会は女性宣教師と上級生によって指導された。また、食事の準備や時間を知らせるベル係（授業時間も含む）も寮生が当番で担当した。これ以降も、同様の日程が踏襲されているが、寮生たちの回想録から寮生活の一端を引用しておきたい。

> 生れてはじめて西洋婦人を見た私は、奇異の眼を見張って其婦人を眺めて居りましたが、今日からは斯云ふ人と寝食を共にしなければならず無いと思った時、懐かしい悦ばしい様に思ひましたが、又一方に怖いと云ふ感じも致しました。凡て軍隊式に何事もベルで行動しました。……上級生が室長となって善く世話をした為、一つは秩序整頓した風を作ることが出来たと思ひます。生徒は姉妹のように親しみ合ひました。年長者は小さい人たちに対しては凡て責任を負ふて善く世話をし、着物の面倒迄見てやりました。又、舎監は一人づゝ我子の様に行届いた世話を致しました[18]。
>
> 同志社女学校には取り立てて書く程の規則は一つもありませんでしたけれども、凡て自由自治の中に互に守り互に制裁為合って、其所に同志社独特の良校風が生まれました。自習時間は午后７時半から10時15分までありました。此間９時の時計が鳴ると15分祈祷がありまして、又自習が続きました。各室一つのランプの下に４、５名づゝ集まって、百人近い寮生が咳払ひ一つする人も無い程無言で、唯数学をする石筆の音、英語の辞書を繰る紙の音ばかりが、粛とした静寂を破って居りました。前舎監スタークエーザー先生が遺された良風であったと思ひます[19]。

質素にして労働に重きを置き是を尚ぶと云ふ風習は、先生並びに生徒間に養はれてありました。故に何事も自治で三度の膳立は生徒の役目にて、夕の炊事には交代に女中の手伝もしました。此労働を神聖なるものとして尚ぶ習慣は……生徒自身の間に養はれた良習で、是が他校の寄宿舎生活に誇る事の出来る一つの特徴であります[20]。

先生が洗濯をやかましく注意して、襦袢の汚れ等を見付けられました者は品行点を引かれました。寒中は汲み置きの手も切れる様な冷水で雑巾掛けをさせられ、底冷えの酷い京都の冬に火の気無しで通しました。……夜寝る時には、羽織も着物も一つ一つ畳んで毎夜寝押しをして、朝にはちゃんと折り目の付いた着物を着る習慣をも付けさせられました。髪の毛一本乱れて居りましても小言を云はれましたから、何時も櫛を帯の間に入れて置いて、水鏡で撫で上げました[21]。

同志社女学校に専門学校令による専門学部が発足するのは1912（明治45）年のことである。本科に５年制高等女学校卒業生を標準とした各３年の家政科、英文科を設置し、４年制高等女学校卒業生を対象とした選科を置き、定員を合わせて180人としている。学科目は単に家政、英文を専修させるのではなく、多くの随意科目を揃え、さらにリベラルな教科を配置している。最初の入学生は家政14人、英文22人の計36人であるが、そのうち17人が選科生であった。しかし、同年11月には早くも改正を申請し認可を得た。主な改正点は、予科（１年）、国文科（３年）、各研究科（１～２年）を設置したことであり、生徒数は漸増を続けた。1920（大正９）年には119人が入学、1924（大正13）年の入学者は398人で最大を記録し、専門学部在学生は1923（大正12）年458人、27年（昭和２）年721人である。

1924（大正13）年には、中等学校教員無試験検定校に指定されており、教員希望者の多かった同志社女専にとっては、さらなる充実期をもたらす朗報となった。他方、1921（大正10）年には同志社大学が女子を選科生として入学させるという学則改正を申請し文部大臣からの認可を得、23年には本科学生として女子の入学を認めた[22]。この措置により、専門学部卒業生の進学先が拡大することとなった。

1930（昭和５）年には、それまで「同志社女学校普通科」（その後、高等普通学部、普通学部、高等女子部と改名）および「同志社女学校専門科」（その後、高等学部、専門科、専門学部と改名）などと呼称してきたものを「同志社高等女学部」および「同志社女子専門学校」と改めたため、「同志社女学校」の名称は消失した。大正期を通しての各科の発展に対応した措置であった[23]。

同志社専門学部が発足した1912（明治45）～45（昭和20）年までの34年間の総入学者は5,567人であるが、そのうち1,513人が卒業しておらず、中途退学者の割合は27.1％[24]に達する。特に1932（昭和７）年以降は入学者が急減し、中退者が30％を超えたが、その背後にはニューヨークに発する不況の影響があった。逆に1943（昭和18）年からは入学者が増加しているが、そこには女工回避のための選択肢という要素の有無が指摘されている[25]。しかし、入学者にも動員が課せられ、特に1943（昭和18）年に学徒動員体制が確立してからは勉学の機会が奪われ、さらには「父兄応召」「疎開」「帰国」などの理由により、中退者の増加をもたらしていったのである。

同志社女専への外地（台湾、樺太、朝鮮、関東州）、外国（中華民国、満州国、アメリカ）からの日本人入学者は1912（明治45）～45（昭和20）年間に320人であり、最も多いのは朝鮮からの111人である。日本の植民地支配の展開と戦時下という条件が反映[26]した数と言えよう。なお、同志社女学校中退者の中には朝鮮の淑明女学校創立に関わり、その後1936（昭和11）年に没するまで

学監（副校長）・理事長等を歴任した淵澤能恵（1882～85年在籍）[27]がおり、専門学部教授であった柳宗悦、兼子夫妻も朝鮮と深い関係があったことを記しておきたい。

2）同志社女子専門学校の留学生

1910（明治43）年代になると、日本の植民地であった台湾、朝鮮をはじめ、中華民国からの留学生が来校するようになり、中でも朝鮮からの留学生が７割以上を占めた。中退者はそれに倍する数があったものとみられる。同志社女専の入学案内からは、上述の国・地域からの受験生獲得に力を入れていたことが窺え、それは特に外地の受験場の設置として現れている。朝鮮についてみると、1930（昭和５）年度には朝鮮京城の淑明女子高等普通学校に受験場を設置、同志社女専の受験者には「受験中本校寄宿寮に宿泊する事を得」とし、淑明女高普が宿舎を提供したことが分かる。1940（昭和15）年には新たに平壌公立高等女学校にも設置されている。当時、平壌やその近辺にはキリスト教主義の女学校が多かったが､その卒業生の獲得を目的としたものであろう。留学生の出身校で目立つのは、正義女子高等普通学校、梨花高等女学校、貞信女学校、平壌崇義女学校（以上、キリスト教系女学校）、淑明女子高等普通学校などであり、キリスト教系女学校から女専へのルートがあったものと考えることができる。

朝鮮出身者が最も多かったのは1936年の家政科で、卒業生45人中７人を数え、中退者も４人いた。同年家政科を卒業して就職したのは９人であるが、そのうち４人が朝鮮人留学生であり、いずれも朝鮮の高等普通学校・女学校の教師として赴任している。

世古口まさは３年間寮生活をしたが、朝鮮と台湾出身者と同室であった。友人が訪ねて来るとそれぞれの母語で語り、国際的な学校だと実感したという。休暇には閉寮になるのでそれぞれ帰省したが、短期の休暇には三重県の世古口の家にも同道した。各地方のアクセントの差異は現在より大きかったため、出身地を尋ねられて「朝鮮」と答えても、「青森」「九州」と答えるのと同じ感覚だったという。当時、女専には制服はなく、留学生は教室へもしばしばチマチョゴリで出席した。世古口は朝鮮人留学生の実家から当時は珍品のキムチが送られてきたことも記憶しており、留学生は一般に裕福で、熱心なクリスチャンが多いと感じていた。寮生活そのものがキリスト教的色彩を帯びていたため、そのような空間では留学生たちに対する差別意識はなかったと言う。卒業前に世古口は、平壌、大連、九州出身の３人を伊勢神宮に案内したそうだ[28]。しかし、朴宣美は、同志社女専の卒業生から聞いたという以下の話を記している。一歩女専の外に出た時、朝鮮人留学生がどのように受け止められていたかが伝わってくる話である。

> 日曜日は伏見の朝鮮人教会に行きました。その時は、できるだけ朝鮮服を着て行こうとしました。その服装で道を歩くと､道で遊んでいた小さい子らが､「あそこに鮮人が来る」と言って寄り集まって来て、わざと私にぶつかったり、笑ったりし……、私をからかいました（留学生Ｔ氏談、同志社女専家政科、1935～38年）[29]。

また、朴は次のような話も聴取している。

> 寄宿舎に入ると、三年生の先輩らが蜜柑をくれました。私は何も知らず、（蜜柑の）ふくろが薄いから、ふくろをむかないで全部食べましたが、先輩らはふくろをむいて食べていました。そして私に「ふくろまで飲み込まないで吐き出して」って、何回も言ってくれました。みんな、やっぱり朝鮮人だと言われ、蔑視されないように気をつけたんですね。日本人がふ

くろをむいて食べるから、こちらもむいて食べるという話です。……こんな思い出は、まだまだあります。……その人（日本人）がやるようにやることを先輩らが教えてくれたので、そのようにしました。寄宿舎から出かける時、帰ってくる時、玄関でこうしなさいとか、いろんな礼儀とか、とにかく、なにもかも他の人がやるようにって（留学生Ｉ氏談、同志社女専家政科、1935～38年）[30]。

留学生はこのような些細なことにまで「日本人のやり方」を守ろうとし、「日本人のようにしよう」と気を使っていたのだが、日本人側は全く気づいておらず、感性の違いは両者の証言からも明白である。

1920年代から英文科は満州・朝鮮へ、家庭科は北海道への修学旅行を実施している。また、女専の同窓会は1893（明治26）年に設立し、昭和初期までには国内外各地に支部が結成され、京城にも設立している[31]。1966年に韓国を訪問した湯浅八郎同志社総長（1934～36年及び1949～50年在職）は、以下のような記述を残している。

聞けば韓国には約120名の同志社卒業生や中退者がある由だが、その中約60名がソール（ママ）在住とのことである。その人たちは中学や大学を出た人も女子部の出身者もあるので、現在は男女合同で同志社学園同窓会が組織されており、ソール女子大学総長の高凰京博士（昭和３年女専英、同６年大法卒）が会長……である。当夜の出席者は18名、内３名は婦人であった。それは高会長のほか呉春庚（昭和８女専家）工大教授夫人と金光子（昭和28女専英、大阪在住）さんたちであった。出席者はいずれも現在、韓国の実業界や政界や教育界において指導的な重責を帯びた人たちであって、皆母校同志社に深い関心を寄せておられるのである[32]。

朝鮮人留学生は帰国後教職に就いた人が多く、朝鮮戦争休戦後、韓国内で大学院に進学したり、米国留学をした卒業生も見られる。専門学部における最初の留学生は、1927（昭和２）年３月英文科卒業の金末峰（『中外日報』記者を経て作家、また韓国最初の長老派教会女性長老、社会改良・婦人解放活動家としても著名）であり、翌年３月高凰京が卒業している。以下に、韓国の高等女学校に関するインタビュー調査でも話題になった高凰京を紹介し、その生涯を概観する。

高凰京（コファンギョン）（1909～2000）

同志社女子専門学校を卒業した朝鮮人留学生の中で、最も傑出した一人が高凰京である。高は1924（大正13）年４月専門学部英文科予科に入学し、28（昭和３）年３月に本科を卒業した。卒業記念アルバムにはチマチョゴリ姿で映っている[33]そうだ。

高は1909（明治42）年３月、黄海道長淵（現、北朝鮮）[34]のクリスチャンホームに１男３女の次女として誕生した。父の高明宇は医師であったが、黄海道遂安の金鉱病院に勤務していた頃、同地には女児のための学校がなかったので、「隠真女塾」を創設して娘や地域の女児に教育を受ける機会を与えたと言われている。高はアメリカ留学の経験がある父からは英語やオルガンを習い、祖父の高李崙からは儒教教育を受け漢文を習った。しかし、良妻賢母になるための教育を押し付けられたことはなく、むしろ女性指導者になるよう自由に自分の意志で生きていくことを意図して育て[35]られたと言う。一歳違いの妹は、東京女子医学専門学校に留学している。

高が同志社女専を選んだ理由は、「キリスト教主義で普通の日本人学校とは違う点があると思ったからであり、外国人教師が多いのでいい英語を学び最終的留学先をアメリカにおいていたから」[36]だった。在学中の成績は上位を維持しており、２、３年次の英文学は柳宗悦に学んでいる。

柳の励ましが大きな力になったそうだ。柳兼子[37]に音楽を、戸坂潤に哲学を学んだ。在学中の乙保証人は大島正健[38]である。

高は入学初日から朝鮮服を着用し、その後も洋服か白またはピンクの朝鮮服で通したが、クラスメートは何の違和感も持たなかったという。高はミリアムクワイア[39]（聖歌隊）に所属し、1927（昭和２）年には同聖歌隊を指導したシャネップ教授・柳兼子に引率され、名古屋と岡崎で行われた同志社女学校校舎改築資金募集音楽会に参加している。注37でも言及したように、高は満州・朝鮮への修学旅行には参加していないが、旅行が迫った頃、予科からの親友竹村（景山）春那に「朝鮮をよく見てきてほしい。同朋の惨めさを直視してきて」としみじみ語ったという。日頃そのような点に触れることのなかった高には珍しいことであり、竹村は「高さんは行かなかった。行くのがきっと辛かったのだろう」と回想している[40]。

1928（昭和３）年、英文科を卒業した高は同志社大学法学部経済学科に入学した。同学部同期の女子は150人中３人で、女専同期の大連からの留学生王秀生が法律科に在籍している。高は社会問題、国際公法、経済学史、英書、仏書などの成績は抜群であったが、選択科目の植民地政策は履修していない。

大学進学後は寮を出て、京都キリスト教女子青年会（京都 YWCA）に寄宿した。夜は YWCA で英語を教え、朝鮮人教会で朝鮮語や朝鮮の文学、歴史を教えた。一方で社会事業に関心を持ち、女専時代に引き続き賀川豊彦を尋ね賀川の信仰と事業について学んでいる。このような行動をする高に特高警察が訪ねてくるようになった。それ以前に、八幡市出身の前出竹村春那は帰省の際、下関まで高と同行して関釜連絡船に乗るのを見送ったのだが、高は「あれは警察の人よ、私たちを監視しているの」と竹村に語りかけたことがあった[41]ということである。

既述のように、高は日本留学時からアメリカ留学を目指していたが、1931（昭和６）年３月に卒業[42]すると、同志社から朝鮮人として初の奨学金を受けてミシガン大学に留学した。校友会京城支部は同年７月10日に第一回定期例会を京城青年会社交室で開催したが、この会は高の歓迎と歓送の会でもあったことが、同窓会誌に記されている。

> 朝鮮人の婦人として母校の最初の法学士高凰京嬢が８月上旬にさらに鵬翼を張ってミシガン大学へ入学の為め其の歓迎と送るの会を兼ねる事となし、丹羽清治郎氏校友会を代表して迎送の辞を述べ、高嬢は上品なる国語にて感謝の辞を以て我等の好意を謝せられ来会者共に晩餐を共にした[43]。

高はミシガン大学修士課程では経済学を、博士課程では社会学を専攻し、帰国後の1937（昭和12）年に、「デトロイトで起った少女犯罪の季節的分析」という論文により博士号を取得している。

高は1935（昭和10）～45（昭和20）年まで梨花女子専門学校で教鞭をとった。その傍ら、同女専音楽教授であった姉の高鳳京とともに、京城郊外の農村で児童や青年の教育、住民の無料診療、老人介護などのための施設「京城姉妹院」を設立し、自費と募金のみで運営した。42（昭和17）年には「嬰児館」、翌年には非行少女のための「京城姉妹院家庭寮」を開設するなど、農村と女性のための社会事業の実践に尽くした[44]ため、高は同地では最初に組織的な社会福祉を行った人物として知られている。

朝鮮総督府は上記のような活動をしている高を植民地統治に協力させようとし、女性の戦時生活や皇国臣民としての心得などに関する地方巡回講演を課した。しかし、講演のほとんどの時間を衛生、栄養など農村婦人の健康や生活改善について費やすのが常だったと言う。そのため、創

氏改名をすることなく本名を貫いたことも合わせ、高はしばしば警察に呼び出されるという経験をした[45]ようである。

高は1945（昭和20）～46（昭和21）年には出身校でもある京畿女子高等学校の校長に就任するとともに、46年春には教育使節団の一員として渡米、９月に米軍政下で保健厚生部に婦人局が設けられると初代局長に就任した。高が校長当時、京畿女高の生徒だった鄭世華氏（1932～）は筆者のインタビューに以下のような思い出を語っている。

> 高先生は韓国で二番目に外国でph.Dを取った方です。……高校長先生はとっても忙しかったんです。アメリカの占領軍がその時入って来ていますしね。校長先生もUN、国連に行かれるし、世界中に何か会議があって行ったり来たりしていらっしゃるので、学校で私たちに姿を見せるということがほとんどありませんでしたが、帰国したら全校生を講堂に集めたんです。そうして、どこに行ってきたか、そこで見てきたのはこういうことであって、世界の女性が今このような生き方をしている、それを「１時間話をしますよ」と集めたのに、３時間も話したことがありますよ。その時私は本当に校長先生の話を吸収したんです。世界はこのように変わっている、女性はこのようなことが出来る、このような時代になったんだなあということをつくづく悟りましたね。先生は後でますます忙しくなったので、とうとう校長をお辞めになりました。そして、先生は後にソウル女子大学を創立されたんです[46]。

高から大きな影響を受けた鄭はソウル大学哲学科を卒業し、梨花女子大学校教授、京畿女子高校長、女性開発院院長などを歴任、高と似た道を歩んだ。

その後、高はロックフェラー財団奨学金により再度アメリカに留学、プリンストン大学とコロンビア大学で人口問題を研究した。大韓母の会会長、赤十字社組織委員、国民教育憲章制定委員等々の要職を歴任した他、国際的にも活躍、1950年代にはイギリス国連協会の後援により800回に及ぶ講演を行い、アジアと国際問題を語り、韓国文化を紹介した。また、国際教育者大会、国連総会、世界キリスト教大学総長学長会議、アジアキリスト教女子大学女性研究所国際会議等にも参加している。

1961（昭和36）年、韓国長老派教会連合によるソウル女子大学が創立されると、高はその初代学長に就任した。高は大学教育が知的面のみに偏している風潮への批判を込め、知・徳・術を兼備した女性指導者として備えるために、全学生が教室外でも24時間生活教育を行うことのできる生活館教育と家庭管理自習住宅教育を実施した。同校を訪問した湯浅八郎は、学内の様子を以下のように記している。

> 第一そのキャンパスはすばらしい。清浄清閑な絶好の教育環境である。第二に在学生の数は人格主義教育に適当なものであり、その全寮制とある程度の労働奉仕制とはユニークなものである。第三に教育のコースは多少の偏向があるにしてもいずれも韓国民衆の生活に直結するよう工夫せられ、乳牛や野菜園の実習を課している農村科学科もある。第四に学生は各自が自己批判して修養に努める自己採点制を採用している。第五に学生は週末にはそれぞれ寄宿舎を出て家庭に帰り家族や友人との人間関係を温め、社会の実生活からの遊離を防いでいる。第六に酒や煙草は禁じられているが、学園内のダンスパーティなどにはボーイフレンドを招待できるなど、近代的な雰囲気がある。第七に高総長をはじめ十人の教授とその家族がキャンパスに居住していて常に学生との個人的な接触や指導に努めている[47]。

高は1985（昭和60）年、76歳ですべての公職から引退して名誉学長となった。同志社女子大学

は1997（平成９）年、最高の敬意をもって名誉文化博士号を贈呈した。1970（昭和45）年には国民勲章（冬柏賞）を、1985（昭和60）年には５・16民族賞を受賞している。また、高は『女性と社会』他６冊の著書を世に出している。学者として、キリスト者として列挙しきれないほどの要職を歴任し、多くの人々に影響を与え続けた高は2000（平成12）年に91歳の生涯を閉じた。湯浅が、「同志社がこのような韓国女性を卒業生の中に数えることが出来ることは誇りであり光栄である」[48]と讃えるような生涯であった。

３．まとめ　―帰国後に留学生が果たした役割

これまで、多くの紙面を割いて朝鮮からの女子留学生に関し、留学先である４校（女子美、帝国女専、東京女高師、同志社女専）の留学生受入施策や留学生教育の状況を概観し、各校で学んだ７人の留学生の生涯を記すことによって、「留学」が各人にとってどのような意味をもたらしたのかを探ってきた。各人にとって「留学」が与えた大きな意義は既述した通りであるが、本章では、留学生が帰国後にどのような役割を果たしたのかを考察することによって、植民地下にあった朝鮮人女性にとっての留学の社会的意義をまとめておきたい。

まず第１に、羅蕙錫（女子美術専門学校卒業）[49]に代表されるように、特に初期の女子留学生は帰国後、独立運動や女性運動のリーダーとして活躍、３・１運動等を指揮しただけでなく、その周辺に集う女性たちを啓蒙し、男女同権や女性の社会進出等の新思潮を伝播する役割を果たした。青鞜の影響を受けた羅蕙錫が関与した「血誠団愛国婦人会（後、大韓婦人会）」の趣旨書及び会則にも「人権を求め国権を回復する最大の目標に向かって前進したい」という文言となって表れている[50]他、小説や評論、雑誌（『女子界』『學之光』など）を通してもその意識・思想が流布されていった。本稿では触れなかったが、女子留学生の中には３・１独立運動に参加した金マリア（女子学院高等科卒業）[51]、女性労働運動や労働運動論を研究して帰国後に「中央女子青年同盟」を結成、翌年には女性統一戦線組織である「槿友会」[52]のリーダーとなった黄信徳（日本女子大学校社会事業学部卒業）[53]も留学中にその意識や思想を成長させ、帰国後、朝鮮の女性運動の指導者になっていった人たちである。このような人たちの努力によって、徐々にではあるが、社会全体としても女性が置かれている状況を見直し、女権意識の目覚めへとつながっていったのである。

第２に、女子留学生は文化の先導者として朝鮮社会に影響を及ぼす存在となった。女子留学生が日本から持ち帰った珍しいモノ・商品、図書、洋服などは、大多数の朝鮮の人々には手の届かないものだったので、直ちに生活の中で摂取・消費できたわけではなかったが、知らず知らずのうちに、家族や住民たちに影響を及ぼすことになった。住民たちが女子留学生の身体から滲み出る新しいもの、異質なものに反感を持つにせよ、好奇心や好意を寄せるにせよ、「日本」や「日本近代文化」を身近に感じるようになり、何らかの形で影響されていった[54]と言える。その範囲はモノ・商品、ファッションなど目に見えるものばかりでなく、当然、考え方や生活様式にも及んだ。少しずつではあるが、目に見えるモノの吸収を先頭に、周囲や社会に影響が広まっていくための先導的役割を留学生たちは果たしたのである。

第３に、女子留学生は帰国後、教員、医者、新聞や雑誌の言論従事者、芸術家など、多様な分野の専門家として社会に進出していった。本稿で紹介した７人全員が教育に携わっている。中でも、羅蕙錫は画家として「女子美術学舎」を開設し、李淑鍾は幾多の学校での勤務の後「誠信学

院」を創設、現在は幼稚園から大学院までを擁する学院に発展している。高も「ソウル女子大学」の現在に続く発展の基礎を築いた。帰国した留学生たちが教員になって女生徒に影響を与え、次の留学生を生み出すという「循環」が植民地期を通して展開している。留学生たちは、向学心に燃える生徒や住民のあこがれの対象であり、「モデル（模範・手本）」として大きな意味を持ったのである。

また、医学・薬学を志して留学した女性も多いが、朴はそこに医療分野で活躍した婦人宣教師の影響があったことを指摘している。1876年の開国以来、女子の医学教育分野に対する朝鮮政府の特別な方策は見当たらないが、婦人宣教師の影響により、医者は女性の専門職として早くから認識されるようになった[55]と言うことである。開国直後はアメリカへの留学者が見られるが、1910（明治43）年の併合後は留学先が日本に変わり、東京女子医学専門学校、帝国女子医学薬学専門学校等を目指して留学者が海を渡ってきたのである。

留学生たちは多様な分野の専門家となって朝鮮社会の発展に尽力したが、留学生たちの真価が発揮されるのは朝鮮戦争休戦以後のことである。国内の大学院をはじめ日本の母校の大学院等へ入学したり、海外の学会に参加して学びを深め、蓄えた力を社会に還元し続けたのであった。

第４は、内地日本への留学を通し、日本を知る人たちが育ち、その人たちが上記１～３の役割を担って朝鮮社会に帰ったという事実そのものが持つ役割である。「両国の懸け橋」になった人もいるが、内地日本での実体験により、たとえ否定的に捉えたとしても、内地日本を知る者として社会に存在した意味は大きい。留学した者にとって、留学した国は特別の意味を持ち、気にかかる存在であり続ける。現在でも元留学生たちが日本と韓国の関係に常に関心を寄せているのはその証左であり、それが「留学」のもたらす、重要な社会的意義だと言えよう。

「植民地」だったために、はからずも内地日本への留学を選択した朝鮮人女子学生がいたことは間違いなく、それ故に異なる文化の中で苦痛や悲しみを味わうこともあったに相違ない。しかし、逆境の中でも高い志を堅持し学びを続けることによって得たものは計り知れないはずだ。そのような大きさ・深さを彷彿とさせてくれる幾人かの元留学生との邂逅は、筆者にとっても貴重な財産となって生きている。

注

1　「植民地下朝鮮からの女子内地留学生（Ⅰ）」で取り上げた。
2　「植民地下朝鮮からの女子内地留学生（Ⅱ）」で取り上げた。
3　朴宣美『朝鮮女性の知の回遊―植民地文化支配と日本留学』、山川出版社、2005年、p.35
4　宮沢正典『同志社女学校史の研究』、思文閣出版、2011年、p.139
5　同上、p.140。なお、1926年末の在内地朝鮮人学生は全国に約3,000人であり、内2,000人が東京に在住、京都府在住者は男子193人、女子12人であった。この数から考えれば、同志社女学校の在籍者は決して少ない数ではない。
6　ウーマンズ・ボードは1868年１月「ニューイングランド女性海外伝道会」の名称で超教派のキリスト教女性団体として発足したが、同年９月に規約を改正し、ニューイングランド地方に限定せず広く女性宣教師の海外派遣を支援し、異教の国々の女性と子供のための仕事に必要な資金を集める活動を展開するようになった。同志社女学校に対しても、女性宣教師の派遣、校舎の建築をはじめ多くの支援を行った。

7　アメリカンボード婦人宣教師としては７番目の渡日者であった。1640年頃、イギリスのマン島からニューイングランドに初代入植者として移住してきたピューリタンの一家に誕生（1849年）し、アメリカで最も古いセミナリーであるハートフォード・フィーメイル・セミナリーで教育を受け、しばらく教師をした後来日した。彼女の手紙は他の婦人宣教師と比べて一段と文章の格調が高く、用語の選択、比喩の用い方等に見られる表現の巧みさは、彼女自身の素養もさることながら、セミナリーで受けた教育に負うところが多いと言われている（坂本清音「同志社女学校初代婦人宣教師Ａ・Ｊ・スタークウェザーの苦闘」、同志社大学人文科学研究所編『来日アメリカ宣教師』所収、現代資料出版社、1999年、pp.304～305）。

8　記念写真誌『同志社女子大学125周年』によると、スタークウェザーを送り出したウーマンズ・ボード宛ての手紙から、1876（明治９）年10月24日を京都ホームの始まりの日としてきたが、「明治９年の頃、私はデビス宣教師と相談の末、女学校を始めては―という事になり、私の宅でいつ開講式があったということなく始めました。……時日は明治９年の２月であったと覚へて居ます」という新島八重の話から、同年２月には「家塾」が開設されていたことが判明している。家塾の様子に関しては「私がABCを教へ、デビス氏の奥様の姉君ミセス・ドーモンと云ふ方が教師として教へて下されました」と記されている。生徒は３人（９歳になる男児と２人の姉妹）だったが、病死や退塾のため家塾は自然消滅し、京都ホームへと引き継がれたようである（同志社女子大学ホームページ掲載同上誌「私塾時代の同志社女学校―同志社女学校の始まりはいつか」参照のこと）。

9　宮沢前掲書、p.ｖ

10　スタークウェーザーを助け、ホームに関わる者を送ってほしいとの要請に応じて来日したパーミリーは、家政担当者としての任務を果たしつつ京都在住認可証（パス）が下りるのを待ったが、京都府知事牧村の邪魔立てにより発布が遅れ、認可証が発行されたのは来日から３年後の1880年６月のことであった。パーミリーが女学校のためにフルに働けたのは１年半に過ぎなかった（坂本前掲書、pp.310～311）。

11　矢野咲（1892年女学校本科卒業）の回想、同志社社史資料室編『創設期の同志社―卒業生たちの回想録―』、1986年、同朋社、p.371

12　田中竹（1892年女学校本科卒業）の回想、同上、p.403

13　他に別科として３年制の「英語会話」、１年制の割烹科、裁縫科、編物科が設置された。

14　林（佐伯）外浪（1888年女学校本科卒業）の回想、同上、pp.358～359

15　長谷場知亀（1892年女学校本科卒業）の回想、同上、p.384

16　「女学校問題と新島夫妻の役割（1884年７月10日付ウーマンズ・ボード書記クラーク宛報告）」より引用、前掲記念写真誌『同志社女子大学125周年』所収。女性宣教師と新島襄等との確執に関しては、坂本前掲論文の他、本井康博「京都ステーションとしての同志社」にも言及されている（いずれも前掲同志社大学人文科学研究所編『来日アメリカ宣教師』所収）。

17　同上、「明治20年代の寮生活」より引用

18　前出長谷場知亀の回想、同志社資料室前掲書、p.384

19　深田照（1891年本科旧課程卒業）の回想、同上、p.350

20　海老名みや（1876年頃女学校退学）の回想、同上、p.42

21　杉山恒（1884年邦語科卒業、1889年本科卒業）の回想、同上、pp.337～338

22　海老名弾正は同志社総長就任時から同志社における男女共学の実現を構想しており、改定理由で「女子ト雖モ相当ノ学力アル者ハ選科生トシテ入学差支ナシト認ム」とした。1923年には「男子の大学に女子の入学を許す」ことにしたが、当初は入学資格を指定校卒業生に限定していた。指定校の拡張・廃止を経て、外国語履修などの一般化された条件下で女子を受け入れるようになったのは1940（昭和15）年のことである。

23　宮沢前掲書、p. iv

24　同上、p.123

25　同上、p.124

26　同上、p.131

27　淵澤能恵については、拙論文「植民地下朝鮮における淑明高等女学校」、『岐阜大学留学生センター紀要2002』を参照されたい。

28　宮沢正典「同志社女学校と朝鮮」、『同志社談叢』17号、1997年、pp.16～17。なお、世古口まさの回顧談は、すでに80歳になっていた1996年７月に語られたものだと記されているが、卒業年、専門等詳細は不明である。

29　朴前掲書、p.73

30　同上、p.74

31　同窓会海外支部はオークランド、サンフランシスコ、台北、京城、大連、奉天などに結成されている。

32　湯浅八郎「韓国の同志社人」、『同志社時報』第23号、1966年、pp.39～40。なお、湯浅の文中には商工大臣、文部大臣、スイス駐在大使をはじめ大学教授、弁護士等々として活躍している17人の卒業生が実名で記されている。

33　宮沢前掲『同志社女学校史の研究』、p.167

34　同じ長淵出身の張晶玉は、「長淵という地域はキリスト教が広く流布し、中流家庭であれば娘でも京城に行かせるほど勉学を重んじる人が多かった。京城以北の方が文化的に開かれており、人々の意識も高かった」と証言している（拙論文「植民地化朝鮮からの女子内地留学生（Ⅱ）―帝国女子専門学校」、『岐阜大学留学生センター紀要2011』、2012、p.10）。

35　宮沢前掲『同志社女学校史の研究』、p.167

36　同上、p.167

37　柳兼子は、朝鮮民族美術館設立資金のための独唱会を女専就任以前から朝鮮でも日本でも開催した。高凰京の同期生たちの満州朝鮮への修学旅行には柳宗悦･萩原芳枝両教授が引率し、兼子も同行している。東亜日報主催の独唱と修学旅行参加生による合唱の音楽会が企画されていたからである（高は不参加）。なお、柳宗悦は高の１年先輩の朝鮮からの留学生金未峰の乙保証人であった。

38　大島正健（1856～1938）は宗教家・教育者・言語学者。札幌農学校（現、北海道大学）の第１期生であり、クラーク博士の指導を直接受けた一人である。クラークは開校直後、学生たちに一言 'Be gentleman（紳士たれ）' との鉄則を示したが、大島は終生この鉄則を意識して人生を送った。札幌農学校在学中は、第２期生の新渡戸稲造や内村鑑三らと親交を深めた。1880（明治13）年７月に卒業して開拓使御用係となったが、同年10月には札幌農学校予科教員となり、和漢学、地理学を担当した。1886（明治19）年、札幌独立キリスト教会から牧師

に任命されたが、聖職任命の按手を受けていなかったことが問題視され、同88（明治21）年新島襄の仲介で按手礼を受けた。しかし、このことがいかなる組織にも属さない独立教会内部の反発を買い、札幌を去る原因となった。1893（明治26）年10月、札幌農学校を辞職し同志社普通学校の教授（数学担当）に就任、その３年後には市立奈良中学校の校長となった。さらに甲府中学校校長、宮崎中学校校長を経て、1916（大正５）年には京城の私立セブランス医学校（現、延世大学校）教授に就任、養生高等普通学校でも教えた。1923（大正12）年、大島は日本に戻り、1928（昭和３）年には京都帝国大学から文学博士号を授与されている（論文『支那古韻考』、1919年に受理）。1932（昭和７）年からは東京文理科大学の講師を嘱託され音韻学を担当したが、最終講義を終えた２日後に脳卒中で倒れ寝たきりとなった。病床で語った札幌農学校時代の思い出を長男正満が書きとめ、『クラーク先生とその弟子たち』として出版された（教文館、1937年。1990年からは孫の智夫による補訂が加わり、現在も刊行されている）。1938（昭和13）年死去。

39　旧約聖書に登場するモーセの姉ミリアムにちなんで、「同志社を救う陰の力」という意味を込めて活動した。

40　宮沢正典「高凰京―韓国最初の組織的社会福祉の実践・ソウル女子大学初代学長―」、『同志社人物誌96』、p.85

41　同上、p.86

42　1931年３月の同志社大学卒業生のうち女子学生は法学部２人、文学部４人であった（同上、p.86）。

43　同上、p.86

44　同上、p.87

45　同上、p.87

46　2003年９月２日、ソウルの鄭世華氏宅でインタビューを実施した。詳細は、高等女学校研究会プロジェクトチーム編『高等女学校に関する調査資料　No10』、pp.17～46を参照されたい。

47　湯浅前掲論文、p.41

48　同上、p.41

49　拙論文「植民地化朝鮮からの女子内地留学生（Ⅰ）」、『岐阜大学留学生センター紀要2010』、2011、pp.26～28参照のこと。

50　丁堯燮著、柳澤七郎訳『韓国女性運動史』、高麗書林、1992年、pp.151～154

51　金マリアは、1893年６月18日黄海道長淵郡の富豪の家に誕生した。この地はアメリカ北長老教会の初期の伝道地で、マリアの両親は宣教師アンダーウッドから洗礼を受け、三番目の娘にマリアと言う名前を付けた。しかし、マリアは４歳の時父と死別し、10歳の時に母とも死別したが、母はマリアの姉に「聡明なマリアを外国に留学させるように」と遺言していた。北長老教会の経営するソウルの貞信女学校に入学し抜群の成績で卒業したマリアは、一時母校の教師を勤めた後、日本の広島高等女学校（現、広島女学院）を経て東京に移り、貞信女学校と同じ北長老教会系の女子学院に入学した。1918年に東京留学生独立団に参加し、東京女子医専の学生黄愛徳と出会った。東京留学生による「２・８独立宣言」が行われた後、２月17日に朝鮮国内での独立運動工作を目的に帰国、各地で活動を続けた。金マリア、黄愛徳は３・１運動に関連して保安法違反嫌疑で収監されたが、同年８月５日に予審免訴で出獄、愛国

婦人会秘密地下組織の会長として活躍するが、同年11月28日には両名他幹部10人が逮捕された。金マリアは３年の刑を受けて服役したが、1920年に病気で保釈となり、療養中の1921年に上海へ脱出した。臨時政府の黄海道代議員、在上海愛国婦人会幹部として活躍したが、南京金陵大学を経て1923年米国に亡命した。翌年ミネソタ州のパーク大学文学部に入学し、苦学しながら卒業したが、その間も独立運動を続けている。1933年に帰国、教育を通じて若い人々を独立戦線に立たせようと決意し、元山のウィルソン神学校に勤めた。日本官憲は神学校の門を閉じるよう命じたが、金マリアは最後まで頑張り通して後輩の養成に専念し、1945年３月13日平壌の病院で死去した。祖国の独立のために献身した53年の生涯であった（丁堯燮著・柳澤七郎訳『韓国女性運動史』、高麗書林、1992年、大島孝一「金マリアと日本―３・１独立運動のころの女子留学生」、『季刊三千里』17号所収、1979年２月、を参照）。

52　1927年５月、民族・社会主義の二陣営、キリスト教系左翼の朝鮮女性同友会の指導者たちが集まり、女性運動の単一体制を打ち立て、350人の会員が参席する中で発起人大会が開催された。その後、「槿友会」の名称の下に政治思想や宗教、階級の如何を問わず各方面の女性たちが参加し、翌年の大会時には40余の支部が、第４回大会までには全国各地の他東京・西北間島に及ぶ70余の支部が組織され、全国的な規模に発展した。「分散的から統一的に」「自然発生的から目的意識的に」というスローガンを掲げ、汎女性大衆運動を展開した同会が1929年には光州学生運動を支援し抗日運動を主導したが、幹部たちが検挙されたため、1930年には正式解散もなく自然消滅してしまった。槿友会が長く続かず解散させられたとはいえ、綱領に示した「朝鮮女性の固い団結を期する」「朝鮮女性の地位向上を図る」というスローガンの下に婦人運動に対する刺激と覚醒を促進した点は、歴史の重要な一頁を飾って余りあると評されている（丁前掲書、pp.181～183）。

53　黄信徳（1898～1983）は平壌に誕生、一家でキリスト教に入信している。東京女子医専に留学し、３・１独立運動に加わった黄愛施徳は実姉である。黄は日本女子大学に留学、最初から女性労働者への関心を持っていたようで、女性労働問題や労働運動論を中心に研究し、『労働婦人の現状と組合運動』と題する卒業論文を提出している（1926年卒業）。山川菊栄の影響を受け、女子留学生と山川との非公式座談会を開催した他（1923年初夏の頃）、山川の論文の一部を朝鮮語に翻訳して『ルクセンブルグとリープクネヒト』という書名で出版している。山川も黄の思い出を「朴順天さんと黄信徳さん」（『おんな二代の記』、平凡社、2001年）に記している。一方で、黄は三月会（東京）のメンバーとなるが、クリスチャンともつながりを持ち続けた。解放後は韓国の女性問題研究所初代会長として、民法改正運動などに取り組んだ他、ソウルに学校を設立、現在も中央女子中学校、中央女子高等学校として存続している（山川前掲書他、山崎朋子『アジア女性交流史　明治・大正期編』、筑摩書房、1995年にも詳しい）。

54　朴前掲書、p.134

55　同上、p.54